

第5回全国集会（潮来水郷）をふりかえって

林 浩 二

関東での2回目の開催となる第5回大会（1983年）は、水郷地域の霞ヶ浦湖畔を会場として行われた。当時のメモからふりかえってみる。

大滝末男先生からの最初のメモを前年の12月30日に郵便で受け取っているが、大滝先生の調整で期日（8月6日～7日）、宿舎（銚子屋旅館；霞ヶ浦湖畔）はこの段階で既に決定していた。当時大学院のわたしに協力依頼の聲がかかり、茨城県立高校教員の後藤直和先生とわずか3名で準備をすることになった。大滝先生が作られた原稿を適宜調整して最終的な原版にするのがわたしの仕事という感じだったろうか。大会案内は、大滝先生の手書きによる第1報が研究会報11号（発行日：1983年3月）に添付され、ワープロ仕上げで講演プログラムが載っている第2報が同じく12号（発行日：同年6月）に添付されて会員全員に送られた。申込先は事務局でもあった大滝先生のご自宅だったので、参加申込や発表申込は、大滝先生のもとで集計され、手書きメモとして水戸に住むわたし宛に時に郵送された。それを大学の研究室のパソコンの日本語ワープロで作業して参加者名簿やプログラムを作成していた。

準備にいろいろと苦労はあったが、45名の参加、8題の研究発表と当時としては盛会だったろう。宿舎の中に研究発表会場と懇親会場を確保したた

め、移動の手間と時間がとられずに済んだが、こういう形式はこれまでの全大会の中でもあまり多くないように思う。スライドプロジェクタは大学の研究室から借用し、スクリーンは宿のシーツで代用した。

炎天下・猛暑の中、エクスカージョンでは、まず霞ヶ浦東岸と北浦・鰐川を桜井善雄氏にご案内いただき、アサザを含め多数の水草を見ることができ、佐原市水生植物園では福井久治郎氏にご説明いただいた。昼食後に向かった印旛沼では、霞ヶ浦と比べ水生植物相は貧弱だった。

この時の総会で、事務局を京都大学から神戸大学角野研究室に9月に移すこととなり、以来約20年、事務局を引き受けていただいていることになる。

事務作業について思い出すこと；パソコン（NECのPC-8001、1979年8月発売）がわたしの研究室に納入されたのはようやく1980年の初めて、数値計算以外はほとんどできなかった。後継機種（PC-8801、PC-9801）に変わって、ようやくこのころ日本語ワープロとして使われるようになった。ファクスが一般に普及したのはさらに数年後のことで、当時の急ぎの書類のやりとりはもっぱら速達だった。まさに隔世の感がある。